ジェイン・オースティンの語りの技法

――『説得』における感情表現，身体性と演劇性

天野　みゆき

18世紀後半から19世紀にかけて，感情の源と質を探ることへの関心が高まり，読書と感情の関係性も重要な考察対象となった（Pinch 3, 10）。Jane Austen（1775–1817）が完成させた最後の小説 *Persuasion*（1817）[1]は，ヒロイン Anne Elliot の感情に焦点を当て，感情が持ち得る力をテーマの一つにしている。アンの意識は絶えず幸福だった過去に向かうが，かつての婚約者 Frederick Wentworth との再会により，その過去の意味が変わり始める。それと並行して彼女は寡黙な観察者から，自らを語り行動する人間へ，周縁に追いやられた存在から，物語の舞台の中央に立つ存在へと変化していく（Copeland 79, 80）。本稿では，オースティンが登場人物の感情表現と，語り手による読者の感情操作という二つのレベルにおいて，いかに身体性と演劇性を巧みに用いているかを明らかにしたい。また，感情のありようをどのように問題化し，当時の感情をめぐる議論に関わっているかについても考察する。

准男爵の次女であるアンは，「記憶」という「過去」の世界と「現在」の二つの世界を同時に生きている。彼女は，７年以上前に，亡き母の友人の説得によって，財産も地位もない海軍軍人であったウェントワースとの婚約を自ら破棄したが，別離の後も『海軍名鑑』で密かに彼の消息を追い続けてきたのだ。再会後，アンの想いは過去と現在が交錯する中で大きく揺れ動く。かつての恋人たちは共有する記憶を心に秘め，その影響を受けつつ，新たな関係を築いていく。

ウェントワースの「感情をいかに読むべきか」（Austen 53），[2]この一点にアンの神経は集中する。彼女が内に秘める感情の多くは，オースティンの得意とする自由間接話法によって描写されるが，理性によって抑えようとしても抑えきれぬウェントワースへの想いは，ため息や頬のほてり，息苦しさ，神経質な興奮，病的な状態など，身体的，生理的な反応として現れる（Copeland 77）。オースティンは，

---

* 本稿は，日本英文学会中国四国支部第68回大会シンポジアム「イギリス文学と感情の修辞学」（平成27年10月23日，於修道大学）において口頭発表した内容に加筆，修正を施したものである。また，JSPS 科研費 JP26370286の助成を受けた研究の成果の一部である。

[1] 発行年を1818年と記して，*Northanger Abbey* とともに1817年12月に出版された（Jones xlv）。

[2] 本稿における日本語の訳は中野を参考にした。

物語の重要な展開点において，身体性とともに，演劇性を強調することで，アンの葛藤と変化，ウェントワースとの身体的，心理的距離，彼女をめぐる人々との関係性ひいては彼女が生きる社会の縮図を劇的，喜劇的に演出しているのである。

物語の前半で注目すべきは Musgrove 家の団欒の場，マスグローヴ夫人が，かつて見習い将校としてウェントワースのもとにいた，亡き息子についての悲しみをウェントワースに語る場面である。アンは，“a certain glance of his [Wentworth's] bright eye, and curl of his handsome mouth”(58) から，彼がマスグローヴ夫人の息子を軽蔑していたことを確信する。誰よりもウェントワースを知るアンだからこそ，一瞬の“an indulgence of self-amusement”(58) を看破するのである。

一家の注目の的であるウェントワースがマスグローヴ夫人の座っているソファーに移動し，その横に座ることで，ウェントワース，マスグローヴ夫人，夫人の横に座っていたアンの三人にスポットライトが当てられ，それぞれの思いが喜劇的に提示される。

> They were actually on the same sofa, for Mrs. Musgrove had most readily made room for him; — they were divided only by Mrs. Musgrove. It was no insignificant barrier indeed. Mrs. Musgrove was of a comfortable substantial size, infinitely more fitted by nature to express good cheer and good humour, than tenderness and sentiment; and while the agitations of Anne's slender form, and pensive face, may be considered as very completely screened, Captain Wentworth should be allowed some credit for the self-command with which he attended to her large fat sighings over the destiny of a son, whom alive nobody had cared for.
>
> Personal size and mental sorrow have certainly no necessary proportions. A large bulky figure has as good a right to be in deep affliction, as the most graceful set of limbs in the world. But, fair or not fair, there are unbecoming conjunctions, which reason will patronize in vain, — which taste cannot tolerate, — which ridicule will seize. (59)（下線は引用者，以下同様）

夫人は，“a comfortable substantial size”, “her large fat sighings”, “[a] large bulky figure” と，その体の大きさが強調され，あたかも物体のようだが，これこそアンとウェントワースが夫人をとらえている感覚であろう。アンにとっては，再会以来，ウェントワースに物理的に最も接近した場面である。体一つの距離まで近づいた時，彼女の意識と感覚は全て彼に向かい，過去の記憶によって増幅され，

それにとらわれたアンにとって，夫人はもはや一個の大きな物体でしかない。“the agitations of Anne's slender form, and pensive face”の激しさがうかがわれる。夫人が“no insignificant barrier”(59) であること，それは，本心を隠したいというアンの願いにとっては「防壁」だが，ウェントワースの愛をとりもどしたいアンの真の欲望にとっては「障壁」である。夫人の二人の娘が彼と親密になりつつある状況を象徴する障壁とも言える。

この場面は，記憶（過去）がいかに書き換えられ，人の感情に影響を与えるかという問題をユーモアとアイロニーをもって投げかけている点でも興味深い。マスグローヴ夫人の記憶は，時間と忘却を経て無意識のうちに書き換えられてしまっている。亡き息子は生前だれにも愛されなかったのに，彼の「欠点や過失の生々しい記憶が薄れて」(46) いたところにウェントワースが出現したことで記憶の変異が引き起こされ，夫人は初めて悲しみに襲われたのだ。このような人間の滑稽さに加えて，語り手は，大柄な夫人が悲しみにくれる姿が生み出す滑稽さ――「理性（reason)」では弁護できず，「趣味（taste)」の点からは耐えられない滑稽さ――も指摘している。これはどんな人間にも滑稽さを見出す語り手，ひいてはオースティンの視点を示すものであり，語り手はしばしば，このような視点を読者に示唆する。それによって，読者の気持ちを登場人物の感情に引きつけながらも，読者がそれに浸りすぎることを抑制する効果を生み出し，物語で頻出する一つのパターンとなっている。

アンとウェントワースは身体的距離に比例して，心理的にも接近していくかのようである。若者たち皆で散歩に出かけた帰り道，ウェントワースはアンの疲れに気づいて彼女に有無を言わせず，手をとって姉夫妻の馬車に乗せる。この場面では，彼の手に触れた感覚がアンに与えた衝撃が強調され，官能への刺激も示唆される。彼女は「彼の意志と手」(77) がなしたことを思い返し，彼の感情と人間性を理解して心乱れる。

> She understood him. He could not forgive her, — but he could not be unfeeling. Though condemning her for the past, and considering it with high and unjust resentment, though perfectly careless of her, and though becoming attached to another, still he could not see her suffer, without the desire of giving her relief. It was a remainder of former sentiment; it was an impulse of pure, though unacknowledged friendship; it was <u>a proof of his own warm and amiable heart</u>, which she could not contemplate without emotions so compounded of pleasure and pain, that she knew not which prevailed. (77)

アンの思考の流れと感情が，まるで彼女自身の声として聞こえてくるようだ。Norman Page がオースティンの自由間接話法の一つとして挙げる「劇での独白に相当するもの」(131) と言えるだろう。“unjust resentment”の“unjust”には，ウェントワースの怒りに対するアンの抵抗，“perfectly careless of her”には，彼の親切な行為に期待してしまう自分を抑えようとする気持ちが表れている。また，“his own warm and amiable heart”は，オースティンの世界では人間性に対する最高の賛辞の一つである。オースティンの語彙が倫理性と強く結びつき，「頻繁に使用される比較的少数の言葉，主として個人の性質を示唆する形容詞および抽象名詞」(Page 55) が重要であることは，ペイジや Myra Stokes による文体研究によって明らかにされてきた。ペイジが指摘するように，“amiable”はオースティンの理想を表現する語の一つである（55）。また，オースティンの語彙を，「活力」「ふるまい方」「知性」「感情」の四部門に分類してその体系性を論じたストークスは，“amiable”が「感情」表す語彙の核であり，現代よりもはるかに肯定的な意味で“good nature” “warmth of heart”を示し，「温情と敬意を受けるに値する，心優しく，思いやりにあふれた主体」を示唆すると論じる（162）。物語の最後で，語り手がアンについて，彼女の「幸福の源」は“the warmth of her heart”(202) にあると述べるように，アンもウェントワースと同じ心を持っているのである。ただし，彼ら二人の“warmth”には，心優しさや思いやりだけでなく，情熱も含まれることに留意すべきである。

ウェントワースの感情をどう読むべきかという，アン自身が抱き続けてきた疑問に対する答えを見出し，彼の“warm and amiable heart”を再確認した喜びと，彼の思いやりが「かつての愛情の名残」でしかないことを知る苦痛とが交錯する感情。それを一層耐え難いものにするのは，過去と現在の違いを思い知らせる，手に残る感覚にちがいない。

これまで見てきた二つの場面は，『説得』において最もよく知られる海辺の場面，物語中盤のクライマックスへとつながっていく。そよ風に吹かれながら浜辺から歩道へと続く階段を上る彼女に注がれる見知らぬ紳士の賛嘆のまなざしと，それに気づいてアンを一瞬見つめ，彼女の美しさを認めるウェントワースのまなざし。彼らのまなざしの意味を自覚しつつ，まるで女優が舞台に上がるように進むアンの姿は，以後の彼らとの関係，および彼女の変化を象徴的に表している（久守 37-38）。アンは寡黙な観察者から，主体的に行動する者，そして，ときに演じる者へと変わっていくのである。

この変化が決定的に現れるのが，物語後半，バースのコンサート会場の場面である。海辺とコンサート会場が演劇的空間の場として選ばれているのは偶然ではないだろう。アンとウェントワースを結びつける感性，すなわち自然と音楽に対

する鋭い感受性を象徴する場所である。海辺では，アンは他者のまなざしを受け止めるにとどまる存在だったが，コンサート会場では，舞台空間と，そこにいる登場人物たちの位置関係と力関係を意識しながら自ら行動し，演じる者となる。彼女が演じるのは，他者への礼儀を守るため，自分の真情をウェントワースだけに伝えるためである。ウェントワースがLouisaから解放されたことを知ったアンに，最早ためらいはない。

Lady Dalrympleを迎えるために，いち速く会場に到着したSir Walterと二人の娘，そしてMrs. Clayがオクタゴン・ルームの暖炉の一つの前を陣取っている。そこにウェントワースが一人やって来ると，彼に一番近い位置にいたアンが，「さらに少し進み出て，すぐに声をかけた」(146)。そして“formidable father and sister in the background”(146) の存在を意識しながらも，アンが優しく話しかけて彼を会話に引き込む。“formidable”にはアンとウェントワースが共有する思いが表れている。父 サー・ウォルターと姉Elizabethに背を向けているからこそ，アンは正しいと信じることを実行する勇気がわいてくるのである――“she knew nothing of their looks, and felt equal to every thing which she believed right to be done”(146)。ウェントワースの“a distant bow”(146) によって，アンは父が彼を無視しなかったのを知り，自らの“a side glance” (147) で姉が彼に会釈をしたの目撃して少し気持ちが晴れる（“her spirits improved” (147))。ウェントワースも“renewed spirit”(147) を見せる。この場面では，二人の感情を表すのに同じ単語が使われていること，さらにウェントワースの“a little smile”, “a little glow”(147) は，口にはされない二人の思いが通いあう様子を示すと同時に，二人の立場の逆転を強調する。ウェントワースの方がアンの真意を必死に探り，ためらいがちに行動するようになるのである。

とはいえ，ルイーザとBenwickについて語りながら，ウェントワースは思わず自分の想いを語る。アンが何よりも愛する率直さ，時には失言につながったとしても信頼できると考える率直さの表れである。ウェントワースは，ルイーザの家族が彼女の結婚を喜んでいることを口にし，アンを戸惑わせつつ過去を共有する――“A sudden recollection seemed to occur, and to give him some taste of that emotion which was reddening Anne’s cheeks and fixing her eyes on the ground”(147)。また，彼は，ベニック大佐ほどの読書人が新しい恋人を得たことに対する驚きを語る言葉に，アンへの想いをこめずにはいられない――“A man does not recover from such a devotion of the heart to such a woman! —He ought not—he does not”(148)。この瞬間の喜劇性を語り手がほのめかす――“Either from the consciousness, however, that his friend had recovered, or from some other consciousness, he went no further”(148)。一方，アンは周囲の騒音にもか

かわらずウェントワースの“agitated voice”(148) で語られた告白を正確に聞き取り，こみあげる感情に息づかいが荒くなる ――“Anne . . . had distinguished every word, was struck, gratified, confused, and beginning to breathe very quick, and feel an hundred things in a moment”(148)。

このように社交の場での会話というありふれた光景の中で人知れず展開する二人の感情のドラマは，子爵夫人を迎えたエリオット家の一行がコンサート会場に入っていく様子と対比される。――“[T]he whole party was collected, and all that remained, was to marshal themselves, and proceed into the concert room; and be of all the consequence in their power, draw as many eyes, excite as many whispers, and disturb as many people as they could”(149)。これは己の地位と力を誇示することに喜びを覚えるエリザベスと父，ひいては社交界全体に満ちた虚栄心と俗物性に対する風刺であり，対比によってアンとウェントワースの純粋さが際立つ。少し距離をおいたところから二人を見ていた読者は，ほどなく，この場面を反芻しながら外界に対する観察力を全く失うほど己の幸福感に浸るアンの内面に導かれ，いかに感情が人の思考と感受性，行動に影響を与えるかを知らされる。

続く演劇的空間は，バースでマスグローヴ夫人の一行が滞在する宿である。コンサート会場の場面の繰り返し，ただし差異を伴う繰り返しが展開される。同じく社交の場だが，集うのは主に親しい友人たちであり，アンは偽りのない愛情をもって家族の一員のように迎えられる。彼女の心を占めるのは，一刻も早くウェントワースの“unfortunate persuasion”(178)，すなわち彼女と Mr. Elliot の関係についての誤解を解くことだ。それゆえ彼女は人物の出入り，位置関係や会話のやりとりに細心の注意を払い，他者への返答を通して，あるいは他者について語りながら，間接的に自分の想いをウェントワースに伝えようとする。いくどか彼女に注目が集まり，ウェントワースはその場の出来事に全神経を向け，アンに問いかけるような，意識的な視線を送る。二人は他者の中で礼儀に反することがないよう行動しながら（演じながら）感覚を研ぎ澄まして，お互いのまなざしの中に，あるいは声に真意を読み取ろうとするのである。

この二人の緊張感が高まる場面について，三つの点に注目したい。第一は，エリザベスとサー・ウォルターが皆をパーティに招待するために突然訪れたときの人々の反応である。二人が部屋に入ったとたん，その場の空気が凍りつく―― “The comfort, the freedom, the gaiety of the room was over, hushed into cold composure, determined silence, or insipid talk, to meet the heartless elegance of her father and sister”(182)。コンサート会場でも示された，純粋な心のつながりと形式だけの社交の対比がより直接的になされている。“heartless elegance”

という言葉はアンとウェントワースの“warm heart”を読者に思い出させ，いっそう痛烈な風刺となる。エリザベスが人々の反応を全く意に介することなく優雅にふるまい，わざわざウェントワースに声をかけてカードを渡す姿は滑稽ですらある。彼女は過去に自分が彼に対してとった侮辱的な態度は全く問題にせず，現在の彼の立派な容姿と態度がバースの社交界で持つ価値を利用しようとするのである。アンは，ウェントワースの目や口元に一瞬現れる軽蔑を見逃さない。彼女は得意気な姉と父が実はエリオット氏とクレイ夫人の偽善に騙されていることも知っている。姉と父の登場に“oppression”(182) を感じながらも家族としての愛情を持ち，友人たちやウェントワースの気持ちを理解するゆえに深まるアンの悲しみ，不安と葛藤を象徴的に示す場面でもある。

第二に注目すべきは最大のクライマックス，Harville 大佐とアンが男性と女性の感情，愛情の強さと持続性について論じる場面である。アンの間接的な愛の告白がウェントワースに決定的な行動をとらせるのだ。ただし，アンは自分の言葉が彼には聞こえていないと考えており，語り手によって彼女の意図的な演技である可能性は注意深く排除されている。ウェントワースは皆に背を向けて手紙を書いており，彼の「すぐそばというわけではない」(186) 距離にある窓際で，ハーヴィル大佐とアンの会話が進む。議論が平行線をたどる中，アンはついに己の信念を語る―― “All the privilege I claim for my own sex (it is not a very enviable one, you need not covet it) is that of loving longest, when existence or when hope is gone”(189)。うらやむべきものではないとしながらも，愛されること以上に，愛することに幸福を見出すアンの姿勢と，ウェントワースへの変わらぬ愛を表明する言葉である。この直後，ウェントワースが部屋を出ていったかと思うと，手袋を忘れたと言ってもどってきて，机の紙の下に隠していた，愛を告白する手紙を渡して再び部屋を出ていく。彼はアンの真意を受け止め，劇的な早業をやってのけるのだ。この部分は，オースティンが書き換えたものである。最初の原稿では，ウェントワースが直接アンにエリオット氏とのうわさについて尋ねる展開になっていることを考慮すると，オースティンが劇的な展開を目論んだことはいっそう明らかである。[3]

第三の注目点は，ウェントワースの手紙がアンにもたらした“revolution”(190) と，それが引き起こす深刻かつ喜劇的な状況である。激しさを増していくアンの動揺は“a nervous thrill all over her”(186), “her breath too much oppressed” (189) といった生理的な反応として知覚されてはいても，これまでは彼女は周囲の者に気づかれないよう隠すことができていた。だが，手紙がもたらした

[3] 最初の原稿は Austen, *Persuasion* に所収（Appendix A)。

“an overpowering happiness”(191)，“the perfection of her felicity”(192) は自制心では抑えきれず，彼女はパニック状態に陥ってしまう。周囲の者たちの親切心は，ウェントワースと二人だけで言葉を交したいアンの不安をかきたてるだけだ。家まで送るという Charles の申し出を彼女は“vexation”, “cruel”(193) とさえ感じるが，感謝以外の気持ちを表さないようふるまわねばならない。

ついにアンとウェントワースが人目につかない道を歩きながら二人だけで語り合うとき，演劇的展開では省略されるか，あるいはアンに対するまなざしや表情，態度だけで示されていたウェントワースの心理，アンの視点から解釈されていた彼の考えや感情が，彼自身の言葉で雄弁に語られる。この部分のウェントワースの語りは，過去を再解釈し，彼がアンを忘れようとしていたにもかかわらず，「無意識のうちに，否，意図せずして自分の愛を貫いた」(194) ことを告げる，アンと彼自身への“persuasion”だと言えよう。そこには無意識の記憶の書き換えも含まれる。彼は再会したときアンの容貌が変わってしまったとアンの妹に言ったのだが，今や“to my eye you could never alter”(196) と言い，本論の最初で見たマスグローヴ夫人の記憶の書き換えを想起させ，同様の喜劇性を生じさせる。アンにとっては，愛が蘇ったゆえのうれしい失言である。

このように演劇的展開では隠されていたものを最後に明らかにする物語の構成は，読者の好奇心を満たすとともに，読者に自身のこれまでの解釈を確認させ，ウェントワースとアン対しての共感を喚起するだろう。作者オースティンの読者に対する“persuasion”を成功させるのに有効な技法なのである。

では，この物語は当時の感情をめぐる議論にどのように関わっているのだろうか。18世紀後半，感傷小説やゴシック・ロマンスの影響により女性が浅薄な感情に耽溺してしまうという問題に対して社会的関心が高まる中，Mary Wollstonecraft (1759–97) は感傷小説および感性の流行に対してアンチテーゼを提出した（天野 162–67)。オースティンもゴシック・ロマンスのパロディとして *Northanger Abbey*（1817）を書いたことはよく知られている。『説得』は，感情が持つ両義性について，問題提起をしていると言えよう。例えば，読書と感情の関係については，この問題への直接的な答えの一つが，アンの言葉に示されている。彼女は，Walter Scott（1772–1832）や George Gordon Byron（1788–1824）の詩に傾倒する若者ベニックに対して，詩を正しく評価するために必要な強い感情の価値を認めながらも，それに浸ることの危険性を指摘する―― “. . . it was the misfortune of poetry, to be seldom safely enjoyed by those who enjoyed it completely; . . . <u>the strong feelings</u> which alone could estimate it truly, were the very feelings which ought to taste it but sparingly”(85)。アン自身もこの危険な状態に陥っていないか反省するほどである。

男性と女性の感情の性質と愛情の持続性については，ジェンダーに関わる問題であることが指摘される。ハーヴィル大佐との会話の中で，アンは，男性には多く活動があるゆえに感情が弱まりやすく，女性は家庭に閉じ込められているがために「感情の虜になってしまう（[O]ur feelings prey upon us）」（187）と言う。しかも彼女は女性の感情のほうが強く持続し得ることを，女性の「長所」というよりは，「運命（fate）」（187）だとする。“prey”という言葉は感情が人に負の影響を与える可能性を，“fate”は意志によって自制することのできない感情の力を示唆している。

さらに，感情についての議論は証明不可能であることが提示される。男性こそが強く持続する感情を持つのだと主張するハーヴィル大佐は，女性の「移り気（inconstancy）」（188）の例が多くの本に描かれていることを指摘するが，アンは本からの引用を根拠に証明しようとすることを拒絶する。彼女は，男女の感情のありようについての議論は証明不可能であると主張し，その理由として，男女ともに自分の性に対する“bias”から免れ得ないこと，人は身近な，限られた現実から都合の良い実例を見つけて“bias”を強めていくことを挙げる―― “We each begin probably with a little bias towards our own sex, and upon that bias build every circumstance in favour of it which has occurred within our own circle”（189）。しかも，その実例の多くは人の秘密を漏らさずには持ち出せないことをアンは指摘し，感情をめぐる議論の難しさと複雑さを示唆するのである。

以上見てきたように，『説得』は“warmth of heart”を持つ二人の物語を，身体性と演劇性を効果的に用いながら劇的，時に喜劇的に展開している。心の暖かさ，鋭い感受性，情熱の持ち得る力と，それがもたらす幸福感をかけがえのないものとして示しながら，ロマン主義への過度の傾倒や，強い感情に伴う危険性についても警告を発する。アンの友人たちは彼女があまりの優しさゆえに，海軍軍人の妻として大きな苦しみを味わうのではないかと心配するが，一つの希望は彼女の旧友，Mrs. Smith の存在である。アンは彼女と再会したときに，度重なる不幸に屈しない「柔軟な精神（elasticity of mind）」（125）を彼女の中に見出した。それは「苦しみの中でも慰めを見出す性質，災いを直ちに福に転ずる力，我を忘れて没頭できる仕事を見つける力」（125）である。物語の最終章でアンの親しい友人たちの相互影響が語られる中，アンも柔軟な精神を身につけていくであろうことが示唆されているのではないだろうか。感情をめぐる議論において物語は一つの例ではあっても，一般論を確立するための根拠とすべきではない。このような立場をとりながら，オースティンは読者が自身の偏見を自覚し，感情の問題の難しさと複雑さに気づくよう促している。

県立広島大学

引用文献

Austen, Jane. *Persuasion*. Ed. James Kinsley. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 2004.

Copeland, Edward and Juliet McMaster eds. *The Cambridge Companion to Jane Austen*. Cambridge: Cambridge UP, 1997.

Jones, Vivien. "A Chronology of Jane Austen." Austen xl-xlv.

Page, Norman. *The Language of Jane Austen*. Oxford: Blackwell, 1972.

Pinch, Adela. *Strange Fits of Passion: Epistemologies of Emotion, Hume to Austen*. Stanford: Stanford UP, 1996.

Stokes, Myra. *The Language of Jane Austen*. London: Macmillan, 1991.

Wiltshire, John. "*Mansfield Park, Emma, Persuasion.*" Copeland 58-83.

天野みゆき『ジョージ・エリオットと言語・イメージ・対話』南雲堂，2004年。160-75頁。

中野康治訳『説得』ジェイン・オースティン著　筑摩書房，2013年。

久守和子「浜辺のそよ風・海の嵐――『説得』のヒロインと『フランケンシュタイン』のモンスターの旅」久守和子他編著『旅するイギリス小説――移動の想像力』ミネルヴァ書房，2000年。26-45頁。

Jane Austen's Narrative Techniques: Dramatic Representations of Physical Reactions and Feelings of Characters in *Persuasion*

Miyuki Amano

The present essay examines how in her last completed novel, *Persuasion*, Jane Austen deliberately uses dramatic representations of physical reactions and feelings of characters not only to effectively express their feelings, but also to manipulate the reader's feelings toward them. This essay also considers how this novel presents the question of feelings which had drawn much attention of writers and readers in the late eighteenth and early nineteenth centuries.

One of the main themes of *Persuasion* is the power of feelings, with its focus on the feelings of Anne Elliot, the second daughter of a baronet. Subsequent to an unexpected reunion, she and Frederick Wentworth, her former fiancé, gradually form a new relationship, influenced by their shared memories and emotions which they keep hidden inside. Throughout this process, Anne changes from a silent observer into an active performer.

Anne always tries to read Wentworth's feelings. Her complex and irrepressible emotions toward him are often represented as physical reactions aroused and heightened in blushing, nervous excitement and agitation. At the turning points in the development of the story, Austen presents with dramatic and comic effects Anne's inner conflicts, the change in the physical and psychological distance between Anne and Wentworth, her relationship with those around her, and the essential nature of upper class British society.

Through such representations, Austen shows how precious the power of the "warmth of heart", including passion, and the happiness it brings are, while raising a question as to the ambiguity of strong feelings. It should be noted that Austen indicates that the issue of feelings is gender-related as women's feelings are to "prey upon them" due to their social position, and neither men nor women can be free from bias inherent in their own sex. It is also worth noting that the "elasticity of mind," which Anne found in Mrs. Smith, is suggested as the quality to be acquired by Anne herself through their mutual influence, at the end of the story. Though her friends worry that she will suffer especially as a wife of a naval officer because of her tenderness, this

quality will actually help Anne to live in an uncertain future. Taking the position that we should not allow examples in books to be the proofs for establishing a general theory about feelings, Austen encourages readers to realize their own prejudices and become aware of the difficulty and complexity of the question of feelings.

Prefectural University of Hiroshima